

# 大正末期から昭和初期の函館市における 「林間学校」の研究 —函館教育会「夏期林間学校」と 函館市「五稜郭林間学校」を中心に—

野 口 穂 高

## はじめに

本論文は、大正末期から昭和初期の函館市において実践された2つの「林間学校」<sup>1</sup>について、目的と活動内容を明らかにするとともに、その教育的な特質や意義を究明するものである。

大正期には、都市部を中心に「身体虚弱児童」が増加したとされ、教育上の大きな課題となっていた<sup>2</sup>。この「虚弱児童」に対する有効な教育方法として注目を集めたのが、欧州を中心に実践されていた「林間学校」であった<sup>3</sup>。たとえば、文部省が1926年に発行した「夏期体育施設」に関する調査報告書によれば、1920年には205か所であった「林間学校」の実施箇所数が、1923年には940か所と、急速な量的拡大を見せ、日本全国で実践されるようになったことが分かる<sup>4</sup>。しかし、全国的に隆盛した大正期から昭和初期の「林間学校」であるが、研究成果の蓄積は進展しておらず、その普及の状況や受容の過程、活動の実際や特質などは十分に解明されていない。管見では山田誠<sup>5</sup>、渡辺貴裕<sup>6</sup>、桐山直人<sup>7</sup>の研究などがあるのみである。

ここで、大正期から昭和初期の「林間学校」に関する先行研究を検討すれば、次のようになる。まず、山田は、東京府や京都府で公的な実施主体が実践した「林間学校」の活動内容を分析し、「林間学校」が「虚弱児」の教育を主目的に実施されたことを明確にした。渡辺は各種の実施主体による「林間学校」の教育目的と内容を検証し、「衛生的意義」に基づき開始された「林間学校」に、「教育的意義」が付与されるに至る過程とその背景を明らかにした。渡辺によると、当初「林間学校」の対象者は「虚弱児童」に限定されていたが、次第に都市中間層の児童へと対象が拡大され、彼らの教育要求を充たすために「教育的意義」が重視されるようになったという。また、桐山は、白十次会が茅ヶ崎に設立した「白十字茅ヶ崎林間学校」の実態を詳細に検討し、同校が養護学校へと発展する過程を明確にしている。

以上の先行研究は、大正期の「林間学校」について、各実践の活動内容や意義を明確にするとともに、その受容と普及の過程の一端を明確にした。だが、先述したように、全国で多数の実践が展開さ

れた「林間学校」について、その一部を明らかにするに留まっており、今後は個別の実践に関する研究の蓄積や、各府県における受容と発展の過程を明らかにすることが求められている。特に、大正から昭和初期にかけて、全国各地でどのような「林間学校」が展開されたかについては、未解明となっている<sup>8</sup>。本論文で対象とする函館市の「林間学校」も、神山茂の『函館教育史』にその概要が示されたのみである<sup>9</sup>。

また、先行研究では、「林間学校」が実施された要因について、都市環境の悪化とそれに伴う「脆弱児童」の増加にあったとして概略を示しているものの、地域特有の要因については十分に明確になっていない。すなわち、「林間学校」を実施した各地域において、その生活環境がどのような状況にあったのか、教員らが当時の子どもたちに対して、どのような教育的課題<sup>10</sup>があると認識していたのか等は明らかでないのである。大正期の「林間学校」は、各地域における生活環境の諸問題や子どもの教育課題を克服するために実践されたのであり、地域的要因を明らかにしなければ、その特質が解明できないといえる。筆者は、大正末期から昭和初期に隆盛した「林間学校」の実態や特質、意義を究明する研究を構想しているが、このような個別的、地域的な実践に関する研究を積み重ねることで、「林間学校」の受容と発展の過程や、その特質、教育的意義について総合的に究明することが可能になると考える。

そこで本論文では、函館教育会主催の「夏期林間学校」及び函館市主催の「五稜郭林間学校」を取り上げ、実施に至る地域的要因、目的や活動内容、教育的な特徴及び意義を明らかにする。函館市を対象とする理由としては、先の2つの実践を中心に、市内で多数の「林間学校」が実践されていた点、海外の「林間学校」を文献により受容した他府県の実践とは異なり、ドイツの実践を直接的に見学した経験に基づき、その実施が試みられた点が挙げられる。また、教育会主催の夏期林間学校は1921年に初めて開催され、その後1947年まで継続された。五稜郭林間学校も、1926年の初開催以来、現代まで継続して実施され、2014年で89回目を迎えている。大正末期以降、全国で「林間学校」の開催がある種の「流行」のようになったために、時勢に乗った一過性の実践が増加したが、函館市の事例では長期的に継続されている点も注目される。本論文では、この点をふまえて、経年的な変化にも留意しながら、その特質を論じる。

なお、主な資料としては、函館市中央図書館所蔵の「林間学校」の報告書を使用する。また、以下本文中における報告書からの引用については、煩雑になるのを避けるため「(名称, 回数, 頁)」の形で文末に示す<sup>11</sup>。

## 1, 函館教育会主催「夏期林間学校」の実践

### (1) 大正期における函館区の生活環境と「林間学校」

はじめに、大正期の函館区<sup>12</sup>の「林間学校」の特色を検討する前提として、区内の生活・教育環境について、その概要を確認する。大正期における「林間学校」の実践者らは、その多くが自然を理想的な生活・教育環境として肯定的に評価したり、もしくは都市の生活・教育環境に対し否定的な評価

を下したりしていた<sup>13</sup>。函館区の場合、どのような生活・教育環境下にあったのだろうか。

周知のように、近世までの函館は松前藩の湊のひとつであった。この湊が国際的に注目されたのは、1854年の日米和親条約において、海外の艦船の補給港として開港され、後の日米修好通商条約により、国際的な貿易港として位置付けられて以降である。とりわけ日露戦争後は、北洋漁業の拠点として栄えるなど、明治以降に急速な発展を遂げた地域であった。特に、函館区において「林間学校」が実施されるようになった大正末期から昭和初期にかけての人口は約14万7千人であり「全国第九位ノ大都市」として、また国際的な港湾として、まさに発展の最中にあつたといえる<sup>14</sup>。

一方、区を中心域である西部地区では、急速な人口増加に住宅の供給が追い付かず、深刻な住宅不足が発生した。借家住まいや間借りによる雑居のものも多く、劣悪な住環境での生活を強いられる場合もあつた。このような住宅事情を背景に、1921年に区内で発生した大火を契機として、自然の豊かな区周辺部における住宅地開発が試みられ、理想的な住環境を求め人々の郊外への移住が活発化したという<sup>15</sup>。このように、大正期から昭和初期の函館市においても、都市の生活環境への問題意識から周辺部の自然環境に着目し、郊外への移住を活発化させるなどの動向が確認できる。この「都市批判」と「自然への憧憬」が地域の住民に共有されていた点は、「林間学校」が積極的に実施された東京府や大阪府、香川県などの地域と同様であり、これらの心的要因がその実施に大きく影響していたといえる<sup>16</sup>。

次に、夏期林間学校実施の経緯を明らかにする。函館における最初の「林間学校」は、函館教育会の主催によるものであつた。ここで、夏期林間学校を検討する前提として、函館教育会の動向を確認する。函館教育会は、1881年に函館区内の教育振興を目的に発足した「函館教育協会」を前身としており、1904年に「函館教育会」と名称を変更、さらに1907年に社団法人として改組されている<sup>17</sup>。同会は、奨学金制度の創設（1907年）や市民運動場の開設（1909年）をはじめとして、函館区内における教育の充実に向けた活動をおこなっていた。1917年4月には、教育会の組織として体育部が設置され、この体育部の最初の事業として、区内の児童を対象とする水泳会の開催を決定している。同年7月には第一回の水泳会を七重浜で実施し、多数の参加を得たという<sup>18</sup>。大正期に、「林間学校」を先駆的に実施した大阪府や香川県の場合でも、それに先んじて水泳会や海水浴が盛んに実施されていたが、函館区の場合も同様であつたことが確認できる。

次いで1921年には、夏期の体育的施設として「林間学校」を開催することが体育部により決定された。『函館教育史』によれば、同会の夏期林間学校は、函館における「林間学校の嚆矢」であつたという<sup>19</sup>。この「林間学校」は、1921年8月に、函館区郊外湯ノ川村で実施された。「身体虚弱児童」の養護を主目的とし、区内の児童35名が参加している（夏、1、4）。なお、教育会の夏期林間学校は、その後も継続され、函館教育会が解散する1947年まで続くことになる<sup>20</sup>。

この「林間学校」の開催にあたり、主導的な役割を果たしたのが、当時函館教育会の会長であり、医師でもあつた斉藤與一郎<sup>21</sup>である。斉藤は、ドイツ留学時にベルリン郊外のヴァルトシューレ（Waldschule）を見学する機会があり、その効果を実感していた。帰国後には、札幌で開催された

通俗衛生講演会などで、「林間学校」の実施を提唱したが実現には至らなかったという。そこで、函館教育会の会長に就任後、自らが発案者となり、その実現を目指したのであった。斉藤は、ヴァルトシューレの様子を次のように述懐している<sup>22</sup>。

私がかつて、ドイツ留学当時、ベルリンの郊外シャルロットテン、ブルヒの松林の中に、いわゆるワルド、シューレというものを見学したことがある。そこでは、樹々の間にハンモックをつり、安楽椅子を用意し、バイオリンまたはオルガンの響き朗々たるうちに唱歌が樹間にこだまし、あるいは体操、あるいは唱歌、あるいは臥床と、喜々として児童の遊戯する光景を見た。また、医師の懇切な診断によつて、まだ発現しない疾病の潜伏を摘発、根治するということなども知つた。虚弱児童に、前途の光明を与え、両親の愁眉をひらかせるこの天来の福音を、わが国にもと思い、ワルド、シューレをそのまま林間学校<sup>23</sup>と名づけて発足したわけである。

以上のように、夏期林間学校は、教育雑誌で紹介された海外の事例などを文献によって間接的に受容した他府県の欧米型「林間学校」とは異なり、ドイツの「林間学校」を視察した経験に基づいて、直接的にこれを受容した点が特徴であった。このため、夏期林間学校は、当時日本国内で全国的に流行していた「虚弱児童」向けの「林間学校」の性格を、より強く示すことになった。たとえば、「林間学校」の報告書の緒言では、以下のようにシャルロッテンブルクの「林間学校」を挙げ、結核予防上に大きな効果のあることを述べている（夏，1，1）。

児童教養上知育及び徳育ノ重ズベキト共ニ体育ノ忽ガセニスベカラザルヤ固ヨリ論ナシ体操其他ノ運動遊戯等ヲ課シテ身神ノ発達ヲ企図スル久シト雖モ未ダ病弱児ニ対スル施設ニ至リテハ深キ注意ト研究トヲ見ザリシニ西曆千九百四年獨逸「シャルロットテンブルヒ」ニ於テ始メテ林間学校ヲ創設シテ結核性體質ヲ有スル児童ヲ集メ教授ト治療トヲ兼ネ試ミタリシニ予期以上ノ好成绩ヲ挙ゲタリ茲ニ於テカ此事業ハ漸次欧米諸国ニ普及セラレ最近我国ニ於テモ各地之レガ開催ヲ見ルニ至レルハ寔ニ喜ブベキ現象ナリトス。

以上のことから分かるように、夏期林間学校は、ドイツの「林間学校」に範を求めた「身体虚弱児」向けの「林間学校」であった。また、初めて函館で「林間学校」が開催された1921年は、3月の帝国議会において「虚弱児童」向けの「林間学校奨励の建議」が可決された年でもあった<sup>24</sup>。当時の雑誌記事でも、1921年は日本において「林間学校」の実施が急速に拡大した年とされており<sup>25</sup>、「林間学校」実施に向けた全国的気運の高まりも、実施の背景にあったと考えられる。

## (2) 夏期林間学校の概要

次に、第1回の夏期林間学校を取り上げ、その活動の概要を明らかにする。まず、「林間学校」の

目的については、「函館区内小学校ニ在学スル虚弱児童ヲ擁護シ体質ノ改善ヲ図ル」としていた。実施場所は、函館区郊外湯ノ川村の別荘地であった。湯ノ川村は明治10年代末に温泉が開かれて以降、保養地として多数の別荘が建設されていた。教育会では、函館の資産家であった渡邊孝平の別荘を借り、夏期林間学校を実施している。会長の斉藤は渡邊とは友人関係にあり、このことが渡邊邸での実施につながったと考えられる。報告書では、実施場所について次のように述べる（夏、1、3）。

松樹鬱蒼且緑色濃キ芝生地、中央ニ周囲九十間ノ蓮池アリテ池中ニハ鯉鮒ノ活魚清水ニ姿ヲ現ハシ、遊人ノ興味ヲソ、ソノ中央ニ松樹枝ヲ交ヘタル平坦ナル五拾餘坪ノ小島アリ、樹間日光ノ射映程ヨク机腰掛ヲ備ヒテ学習ノ場所トシテ最適ノ地、池ノ周囲ニハ廣キ運動ノ場所午睡最適ノ樹間至ル處ニアリ、且急雨ヲ避クルニ足ル東屋、自然湧出ノ温泉浴場（一時十数人ヲ入ル、ニ足ル）ニ個所等アリテ何等人工的設備ヲ加ヘザルモ林間校地トシテ理想的ノ地タリ。

また、付近には「廣ク浅キ松倉川ノ下流及ビ水清ラカナル根崎ノ海岸ヲ控エ、夏季保養園ノ水泳水遊ニ飽カシメザル場所アリ、實ニ函館市外ニ於テ林間学校校地トシテ最適地タルノミナラズ恐ラク全国ニ其比ヲ見ザル好地タリ」であったという（夏、1、3-4）。以上の点を整理すると、夏期林間学校は、雨天の際に使用できる東屋、昼寝や遊びに使用できる森林、水泳や水遊びに便利な河川や海浜、さらには温泉など、「林間学校」としての十分な施設を備えていたといえる。また、この時期の「林間学校」は、交通網の整備によるアクセスの良さや滞在中の利便性から温泉地や別荘地で実施されることが多いが、函館市の事例でも同様であったことが確認できた。これらの交通網や宿泊地の整備は「林間学校」実施における重要な条件であるといえる。特に、交通の便については、「毎日往復ノ里程六哩ヲ電車ノ便ニヨリ短時間ニテ往復シ得タリシコト」として、最適地に短時間で通学できたことが良かった点であると、報告書でも述べている（夏、1、20）。

指導者は、函館教育会の体育部員であり、区内松風小学校訓導であった金子平吉を教務主任とし、他に松風小の訓導2名が教務係として携わった<sup>26</sup>。また、校医としては、区内小学校医の高橋米治を主任とし、他6名の学校医が交替で出勤した。学校医は病人や怪我人の救護のほか、「身体検査」などをおこなっている。

それでは、「林間学校」の参加児童は、どのようにして選定されたのだろうか。報告書によると区内の各小学校の4年生から6年生までを対象とし、この中で「身体検査」において「発育概評」<sup>27</sup>の結果が「丙」の児童もしくは体質が虚弱と認められた児童を有資格者としていた（夏、1、4）。募集にあたっては、対象児童の保護者あてに勧誘を実施し、応募してきた児童に対し、再度医師による検診を実施している。そして、検診の結果加入が認められた男児17名、女児18名、合計35名が参加したのであった。大正期の東京市内の小学校で実施された「林間学校」においても、「虚弱児童」の判定に「発育概評」を用いていたが、函館市の事例でも同様であったことが確認できる<sup>28</sup>。また、「林間学校」の参加費用については、児童一人当たり5円と高額であり、このことから考えると、富裕層

向けの「林間学校」であったと考えられる。この点については、齊藤も「ことごとく裕福な家庭の児童ばかりであった」と述べている<sup>29</sup>。

### (3) 夏期林間学校の活動内容と評価方法

夏期林間学校の活動については、身体的発達を目指す内容が主となっている。第1回目の最初の週の活動をまとめると、表1のようになる。

基本的には、午前中を学習や自由遊戯、遠足、見学の時間とし、午後は午睡や休養、水泳など健康増進に関わる内容が中心となっている。各活動について具体的に述べれば次のようになる。まず、朝会では、「帝都」及び父母の居る方向に向かって朝会をおこなうとともに、深呼吸を実施している。また、毎朝、健康診断を実施し、異状があった児童については活動内容を変更するなどの配慮をしていた。学習は一日40分以内として、児童の負担にならないように注意するなど、その制限もおこなわれていた<sup>30</sup>。体操では、男女ともに上半身は裸体として、矯正的な運動を課している。遊戯としては、バスケットボール、頭上ボール送り、デッドボール、場所取鬼、友呼鬼、センタボール、徒競走などが実施された。また、体操や遊戯の後には、冷水摩擦を実施し、身体を強健にさせようと試みている。遠足は主として神社参拝と見学活動が中心であり、乃木神社、湯倉神社、新世界大正衛生博覧会、函館製陶株式会社、五稜郭等を訪問したという。付近の海岸で海水浴も実施しており、雨天の場合は「千人風呂」と呼ばれる温泉入浴施設を利用し、遊泳をおこなった。さらに、毎日1時から2時まで「精神休養肉体安静ノ目的」で昼寝を実施するとともに、帰宅前には湯治として温泉において温浴をおこなうなど、ほぼ全ての活動が健康増進を主目的とするものであった(夏, 1, 8-9)。昼寝については、第2回目からは、ハンモックを利用して木陰で実施されている(夏, 2, 1)。

表1 第1回函館教育会主催林間学校日課一覧

日 時	8月1日	8月2日	8月3日	8月4日	8月5日	8月6日	8月7日
09時00分～09時20分	開場式	朝会, 深呼吸, 健康診断					
09時20分～10時00分	健康診断 休養	読方	遠足	算術	綴方 (林の中)	自由写生	遠足 (衛生博覧 会见物)
10時00分～11時00分	体操	休養, 遊戯		体操			
11時00分～12時00分	史談	唱歌会	自由遊戯, 冷水摩擦				
12時00分～13時00分	食事, 含嗽, 休養						
13時00分～14時00分	午睡					休養室内	午睡
14時00分～15時00分	水遊	水泳	お伽噺	自由復習	水遊	お伽噺	体格検査
15時00分～15時30分	間食, 自由散歩						
15時30分～16時00分	—	温浴					

注、『第一回夏期林間学校実施状況成績』(1921年)より作成

また、夏期林間学校の特色として、男女共学であった点も挙げられる。これについて、報告書では、「男女共学ナラシメシタメ男女間ノ親シミ厚ク且ツ二十一日間一回モ喧嘩争論ナカリシ」と述べ、男女間の親交が深められたと述べている（夏、1、21）。香川県や大阪府の事例では、男女別に学級を編成し、活動内容も異にしていたが、函館教育会の事例では、男女共学に教育的な意義を見出していた点が特徴であった<sup>31</sup>。日常的な教育活動においては、男女別学が原則の時代であったが、夏期林間学校は男女共学の機会になったといえる。

さらに、報告書によれば、起床・就寝の時間、朝食・夕食の時間、間食など、家庭における生活にも注意を加えており、家庭生活の「管理」を目指そうとする姿勢が確認できる（夏、1、5）。また、食後にうがいをすることや、服装は胸や腹を締め付けないもの着用するようにも求めている。基本的な生活習慣の注意や衛生的習慣の確立など、この時期の健康増進を主目的とする「林間学校」の性格がよく表れている。特に、胸や腹を締め付ける服装を避けようとした点は、呼吸器である胸郭の発達や、栄養を吸収する器官としての腹部の成長を妨げることに配慮したものと考えられる。大正期から昭和初期には、身長は高いが胸郭の十分な発達のみられない児童を「狭長症」などと呼称し、結核の予備軍と考えていたことが影響しているといえる。なお「林間学校」の昼食は最初の2週間は弁当を持参させていたが、最後の7日間は寄付金を受けて教育会の支給となった。1週間分の献立を示すと、表2のようになる。

また、毎日午後3時には、ビスケット、煎餅、食パン、馬鈴薯、リンゴなどの間食を与えたという。東京市が主催した「御殿場夏期林間学校」や慶應義塾大学医学部が実施した「佛蘭西寄贈病院育強事業」では、厳密な栄養管理を実施し、カロリー計算に基づく献立を作成したり、ローストビーフなどの洋食も頻繁に饗されたりしていた<sup>32</sup>。教育会の「林間学校」でも、食物に注意を向けてはいるが、一般的に地元で食されていた食材を使用しており、「栄養供給」については厳密な管理をしてはいない。ただし、児童の身体的発達に向け、家庭での食物についても、朝晩の食事には新鮮な玉子を1個程度あたえること、昼食の弁当には、焼肉、玉子焼きなどに適度な野菜を加えること、米飯は固く炊かず、弁当の分は必ず朝に炊くこと、などの注意を与えていた（夏、1、6）。

表2 第一回函館教育会主催夏期林間学校献立表

日付	内 容
8月15日	米飯、薩摩汁（牛肉、馬鈴薯、大根、人参、ササゲ）、胡瓜漬
8月16日	野菜ライス（米飯、馬鈴薯、人参、キャベツ、パイナップル、バター）胡瓜漬
8月17日	米飯、味噌汁（油揚、大根）、胡瓜漬
8月18日	米飯、豆腐餡掛、茄子漬
8月19日	米飯、エリ豆腐餡掛、大根青葉漬
8月20日	米飯、薩摩汁（牛肉、馬鈴薯、人参、ネギ）
8月21日	米飯（櫻飯）、煮込（大根、馬鈴薯、貝柱）、胡瓜大根漬

注、『第一回夏期林間学校実施状況成績』（1921年）より作成

実践者らは、「林間学校」の成果についてどのように評価しようとしていたのだろうか。函館教育会の場合、児童の体重、胸囲、肺活量の測定により、成果を実証しようとしていた。児童の「身体検査」は、初日の開校式後と最終日、また期間中の1週間ごとの計4回実施され、これらの結果は逐一家庭に報告された(夏, 1, 11)。その他、栄養状態の改善や元気が良くなったこと、食欲の増進、睡眠時間が増えたことなども、成果として強調されている(夏, 1, 17)。

以上の活動内容や成果の評価法からも分るように、函館教育会による夏期林間学校は、この時期に多数見られた健康増進型の「林間学校」の典型的実践であった。

#### (4) 夏期林間学校の経年的な変化

最後に、経年的な変化について考察する。まず、「林間学校」の目的、実施場所、通学式の形態などは、大きな変更はなく一貫している。注目すべき点としては、参加人数の増加が挙げられる。たとえば、第1回では35名であった参加者が、第2回では113名に、第3回では149名と増加している(夏, 2, 1及び夏, 3, 6)。なお、最も参加人数が多いのは、第7回の193名である(夏, 7, 3)。一方で、参加費用は、第2回からは、8円とさらに高額になった。この後、8円を基本として、7円から10円の年がある。このように、高額な参加費用を必要としたにも拘らず、参加人数が増加したことは、「林間学校」の関心や需要が函館市内で年々高まっていたことを示しているといえる。

また、第2回目からは、「林間学校」実施後に、保護者に児童の様子を確認する質問紙調査を実施している。たとえば、第2回目における調査では、99名の保護者から回答を得たが、75名が食欲増進し、84名が快眠となったという結果であった(夏, 2, 21)。その他、第3回目の報告書からは、「身体検査」の成績の累年比較が開始された。さらに、第3回目からの大きな変化として、実施前の2月に、前年度参加者に対する質問紙調査を実施した点が挙げられる。この調査では、(イ)既往症、病気に対する抵抗力の増減、(ロ)食欲、(ハ)睡眠時間、(ニ)起床・食事の規律、(ホ)その他林間学校の影響と考えられる事項について質問をし、良好な結果を得た。また、(ホ)その他の事項としては、規律的になった、間食をしなくなった、偏食がなくなった、快活になった、運動好きになった、自治的になったなどが挙げられている。この調査結果から、わずか3週間の実践であるにもかかわらず、児童の体質は内面から改善されたと報告書では述べている。さらに、同会では、「林間学校」の成果は「持続性ヲ帯ブルコト明カナルヲ認ム」と述べて、その成果が持続するものであると強調するのであった(夏, 3, 33-34)。

給食については、第2回目より毎日実施されるようになったが、第5回目には、児童の好む食物や偏食の調査などもおこなわれ、「女兒ハ野菜ヲ好ミ、獸肉魚肉何レモ好マヌ傾向アリタリ」との結果を得たという(夏, 5, 4-5)。さらに、第10回目にも、獸肉、魚肉などの食物の嗜好調査を実施している(夏, 10, 8-9)。また、これらの結果に応じて献立の改編がおこなわれた。大正期の「林間学校」は一過性の活動も多かったが、函館教育会は、継続的に「林間学校」を実施することで、調査結果に基づく活動の改善を可能としていた。

以上が、函館教育会主催の夏期林間学校の概要と特色であった。ここまで明らかにしたように、夏期林間学校は、この時期に国内で多数実践された欧米型の健康増進を主目的とする「林間学校」であったといえる。ただし、他の欧米型の「林間学校」は、文献で得た情報をもとに実施されていたが、函館教育会の場合は、会長の斉藤與一郎自らがベルリンの事例を視察した経験を有しており、さらには結核や衛生学を研究した医師でもあった。このため、健康増進に関する内容が、より重点的に配されていた点が特色であるといえる。また、継続的な実施により、成果や課題に関するデータが蓄積され、それらを基に定期的に改善を実行した点も、その特徴である。その他、本節で触れなかった意義として、函館市内における「林間学校」のモデルとなり、その普及に大きく貢献したことが挙げられる。この点については、次節以降の市主催五稜郭林間の分析を通じて明確にする。

## 2. 函館市主催「五稜郭林間学校」の実践

### (1) 五稜郭林間学校実施の背景

本節では、函館市が開催した「五稜郭林間学校<sup>33</sup>」を取りあげ、その特質を明らかにする。検討の対象とするのは、1926年に開催された第1回から1933年に開催の第8回までとする。第8回を開催した翌年には函館で大火が発生し、市内に大きな被害を出した。このため、市主催の林間学校も中止となり、その代替的な事業として、市と北海タイムス社とが共催し、釜ヶ谷海浜学校が3か年にわたり毎年8月に実施されている。この釜ヶ谷海浜学校以降については、その性格や活動内容にも違いがあるため稿を改めて検討する。また、主な資料として、函館市中央図書館所蔵の五稜郭林間学校の報告書を使用する。なお、同館には、第2回から8回までの報告書が保管されている。第1回については、資料上の制約から報告書が作成されたかは不明であるため、新聞記事を使用して検討をおこなう。

函館市が、初めて五稜郭林間学校を開催したのは1926年8月1日であった。その様子を『函館新聞』は以下のように報じている<sup>34</sup>。

林間学校は今一日一斉に開校した中にも市主催の林間学校は松風かほる五稜郭内の東端に開設せられ一日午前九時四十五分から其開校式が行はれた。集まつた児童は市立小学校十校附属一校に亘り児童数二百二十名片屋根に天幕を張つて其下に削り板の机に居並ぶ可愛い子供等を見られるやう父兄等五十余名は生徒の後ろに陣取る君ヶ代の斉唱に稲垣教育課長、宗像校長、吉岡教育会副会長、柳澤校医諸氏のお話しの後十時半に式が終わつた同校には衛生婦が置かれ一周一回宛此処を訪れて何に呉れとなく世話をする事になり又飲料水は濠水を濾過装置に掛けて用い一日の課程は学習を朝三十分、午後三十分位を宛て他は体操、遊戯、冷水摩擦や遠足を行ふ事になつて居ると云ふ。

記事中にある、衛生婦、体操、冷水摩擦などの記述から分かるように、五稜郭林間学校は、教育会主催の夏期林間学校と同じく、健康増進を目的とする実践であった。また「林間学校は今一日一斉に

開校した」と報じられているように、この時期には教育会の「林間学校」をはじめとして、各小学校単独開催の「林間学校」が多数実施されていた。当時の『函館毎日新聞』や『函館新聞』には、「林間学校」に関する記事が多数掲載されている<sup>35</sup>。これらの記事によれば、1926年には、五稜郭林間学校、教育会主催の夏期林間学校に加えて、常磐、幸、彌生女子、谷地頭の各小学校が「林間学校」を実施していた。また、函館女子小学校も、同年に「林間学校」を実施し、報告書を発行している<sup>36</sup>。このため、少なくとも7校の「林間学校」が函館市内で開校されていたことが分かる。記事によれば、単独で開催していた各校の「林間学校」の目的も「虚弱児童」の養護にあった。このように、「虚弱児童」向けの「林間学校」が市内で多数開催されているなか、なぜ函館市は同趣旨の「林間学校」を開設したのだろうか。報告書では、市が「林間学校」を実施するに至る理由を次のように示す（五，2，1）。

虚弱児童保護の目的を以て当市に夏期林間学校の施設を見るに至ったのは数年前函館教育会で主催されたのを嚆矢とし其後各小学校でも二三是れが実施を見るに至ったのである。然しながら全市二千に余る虚弱児童の保護機関としては収容力の上に於て遺憾の点があり校医会からの建議もあつたので市に於ても好適地五稜郭を求めて昨年第一回林間学校を創めたのである。

つまり、教育会や個別学校の「林間学校」のみでは、多数の子どもが参加するには十分な収容力がないため、市による実施を決めたのであった。特に、学校単独で「林間学校」を実施可能な小学校は、当時中心的な市街地であった西部地区に集中しており、東部地区の小学校では単独開催は難しかった。そこで、より多くの児童が「林間学校」に参加できるよう、市が主催して五稜郭林間学校を開催したのであった。なお、当時の函館の児童数は23,557人<sup>37</sup>であり、「全市二千に余る虚弱児童」という記述から考えると、約1割弱におよぶ児童が「虚弱」であると認識されていたことも分かる。

## (2) 五稜郭林間学校の概要と活動内容、評価方法

五稜郭林間学校の指導体制は、どのようであったのだろうか。同校の校長は東川小学校長の宗像敏英が務め、他に「林間学校」に参加した児童が通う学校の教員が指導員として参加している。詳細な記録が残っている第2回を例にとれば、宗像の東川小学校の他に、宝小学校、第二東川小学校、高砂小学校、新川小学校、松風小学校、若松小学校などから、9名の教員が指導の任にあたった。また、函館市学校衛生主事の橋本敬三が衛生係主任を務め、各校の学校衛生婦9名が輪番で加わっていた。参加児童は「尋常三年以上六年マデノ身体虚弱児童」であり、医師の身体検査を受け許可を得たものとされた（五，2，2）。

次に「林間学校」の期間、施設、時間割、活動内容などを検討する。まず、実施期間は8月1日から22日まで（第一日曜日及び八幡宮祭の15日は休日）となっており、ほぼ夏期林間学校と同様の日程であった。同校は、五稜郭の東濠に面した場所に天幕を使用して開設された。具体的には、9つの天幕を張り連ねて学習室とし、さらに他に2つの天幕を設置し、看護室と湯呑み場にしていた。また、

天幕の傍らには洗面台を2か所設け、洗面所としている（五、2、1-2）。

ここで「林間学校」の活動内容を詳細な記述のある第4回を例にまとめると、表3のようになる。表から分るように、午前中には学習や見学活動を配し、午後は昼寝や呼吸運動、冷水摩擦など衛生関連の活動を設定するなど、夏期林間学校と同じく健康増進型の「林間学校」のプログラムであった。ただし、五稜郭という史蹟で実施したため、五稜郭や函館戦争など地域の歴史に関する講話が実施されている点は特色といえる。

この他、教育上の特色としては、以下の活動を実施していた。まず、昼食時など、食事の際に「フレッチャー式咀嚼法」を奨励していた（五、2、9）。フレッチャー式咀嚼法は、明治末から大正期に米国から伝わった噛むことと健康を結びつけた健康法であり、食事の際によく噛んで食べるように指導がおこなわれた<sup>38</sup>。また、歯磨き指導なども実施されている。たとえば、第2回の5日と6日には歯ブラシを使用して歯の磨き方の練習をおこなったという。特に6日は「クラブ歯磨口腔衛生研究部」の歯科医が訪れ、実際に指導をおこなった。さらに、トラホームや結膜炎の児童に対する点薬洗眼により、その治療上の成果をあげている。その他、耳孔の検査、回虫駆除、女兒を対象とする頭髪検査もおこなわれるなど、保健・衛生的な活動が中心であったことが分かる（五、2、9-10）。一方、五稜郭は水の便が悪く、飲料水も濠の水を濾過装置で濾過して使用していた。指導者らは、濠の水泳に利用したいとの希望を述べていたが、実現は難しかった。このため、濠の水を使った簡易のシャワーを設置し、水泳の代わりとしたという（五、4、9）。

また、「林間学校」の成果の評価法についても、夏期林間学校と同じく、「身体検査」の結果をもとにしてきた。測定する項目は、身長、体重、胸囲であり、開始日、最終日、期間中1週間ごとの計4回実施した点も教育会と同様であった。その成果について、報告書では以下のように述べ、健康増進における効果を強調している（五、2、10）。

表3 第4回五稜郭林間学校日課一覧

日 時	8月1日	8月2日	8月3日	8月4日	8月5日	8月6日	8月7日
08時30分～08時50分	学級編成	朝会					
08時50分～09時50分	開校式	身体検査 学習 自由遊び	学習		亀田八幡 宮参拝	学習  函館戦争 史談	身体検査 学習 自由遊び
09時50分～10時20分			休憩				
10時20分～11時00分			五稜郭 史談	歯牙衛生 講話			
11時00分～11時30分	食事・含漱						
11時30分～13時00分	午睡						
13時00分～13時30分	呼吸運動・冷水摩擦						
13時30分～14時30分	郭内見学 自由遊び	ラジオ体 操	学級随意	自由遊び	学習	田園見学	学級随意
14時30分～16時00分	間食・自由遊び						

注1、『第四回函館市主催林間学校実施報告』（1929年）より作成

三週間ノ林間学校生活ハ虚弱ナル児童ニトツテ天然ノ恩恵ヲ被ムラシメシ事大ニシテ一様ニ血色ヲヨクシ心身ノ澆刺タル元気ヲ増進セシ事ハ著シク目ニツクトコロニシテ本年ハ特ニ天候ニメグマレシ故カ体重ニ於テ昨年ニ比シ三倍ノ増加ヲシタリ三週間ノ訓練ニヨリテ会得セル衛生生活法ハ将来児童ノ体質改善ニ貢献スルトコロ大ナルモノアルベキハ確信スルトコロナリ

以上が、五稜郭林間学校の活動内容と評価法の概略である。その目的や内容から考えると、夏期林間学校と同様に、健康増進を教育の柱とする欧米型の「林間学校」であったといえる。一方で、先に述べた地元の歴史に関する教育がおこなわれていた点も特徴である。この他、歌唱と人間関係に着目し、歌うことを重視しようとする姿勢も見られる。この点について報告書では、「毎日朝礼時ニ八童話ノ唱歌帰ル時ニハコノ道ノ唱歌ヲ一同合唱シタガ頗ル有効デアツター同ガ同一ノ唱歌ヲ歌フコトニヨツテ烏合ノ混成団体ヲシテ暖カイ親シミアル集団トシタコト計リ知レヌモノガアツタ思フ」と記述しており、合唱により子ども相互の交友が進んだとして、歌唱の教育的意義を強調している（五、3、4）。

### (3) 五稜郭林間学校の活動内容の経年的変化

次に、五稜郭林間学校の特質について、経年的な変化を中心に検討する。注目すべきは、夏期林間学校と同じく参加人数の拡大である。各年の参加人数を示すと、第1回190名、第2回282名、第3回347名、第4回396名、第5回506名、第6回541名、第7回619名、第8回545名の参加者となっている<sup>39</sup>。また、報告書によれば、第5回は800名、第6回には900名を超える応募があり、第8回の応募者は1,026名に達したという。応募数が多いにもかかわらず第8回の参加者が減少した理由は、前年度の参加者数が多すぎ、設備や指導の質的な面で課題が生じたため、定員を限定したからである（五、7、はしがき。五、8、はしがき）。五稜郭林間学校の参加者数の急激な拡大は、富裕層のみならず、多くの函館市民、とりわけ児童の家庭において「林間学校」に対する関心が急速に強まっていたことの証左といえる。

特に、市主催の「林間学校」は、費用の負担が間食費のみであった。間食費は1日4銭、全期間の合計で80銭であり、夏期林間学校の8円と比較した場合、10分の1の負担であった。また、第7回において参加児童を決める際には、単独で「林間学校」を実施することができない小学校を中心に児童を選ぶこともあった（五、7、2）。この点について、校長の宗像は「市ノ林間学校ハ比較的家庭生活ニ恵マレヌ児童ノタメノモノデアツテホシイ」と述べている（五、7、7）。

このように、富裕層が多数を占めた教育会の「林間学校」に対し、市の実践は、経済的に余裕のない家庭の児童に「林間学校」への参加機会を付与する役割を果たしていた。一方で、費用を市の負担としていたために財政的に厳しく、参加児童の増大に、施設、指導者、実際の内容が十分に対応できていなかったことも窺える。また、複数の小学校が連合して実施したために、指導者の連携などの問題が生じていたことも分かる。宗像校長の所感としても、指導者間の打ち合わせを早期に開催する必

要性や指導員を充実すること、指導員が「林間学校」やその活動の意味について、十分に理解すべきことが挙げられている。宗像は「例年モデルガ終了後ドウシテモ物足りナイ感ガアル〔中略＝引用者〕父兄ヤ世間ノ林間学校ニ対スル理解ヤ期待ガ高マリツツアルヲ思ヒバ思フホド恥入ル次第デアル」とも述べており、市民の高い期待に対し、十分に答えられていない状況に不満をもっていたことが分かる（五、8、5）。五稜郭林間学校は、多数の児童に対して、「林間学校」に参加する機会を与えることができた一方で、その質的な面では課題も残されていたといえる。

## おわりに

本論文は、大正末期から昭和初期の函館市内で実践された夏期林間学校と五稜郭林間学校について、その目的、内容、教育的な特質、意義を究明することを目的とした。本論文の要点を示すと、以下ようになる。

函館教育会主催の夏期林間学校は、大正末期から昭和初期に国内で多数実践された、健康増進を主目的とする欧米型「林間学校」の典型例といえる。ただし、ドイツで実践されたヴァルトシューレを視察した経験に基づき、これを直接的に受容していた。このため、健康増進に関する活動が、より重点化されることとなった。また、継続的な実施により、成果や課題に関する情報が蓄積され、それらを基に定期的な改善が図られ、成果を挙げていた点も特徴であった。

五稜郭林間学校も、夏期林間学校と同様に、健康増進を柱とする欧米型の「林間学校」であった。ただし、地域の歴史に関する教育や唱歌による指導など、独自の取り組みもみられる。また、函館市内の「虚弱児童」を多数参加させることを目的としたため、教育会の「林間学校」と比べて大規模な実践であったことも特色であった。一方で、参加人数の拡大に施設の拡充が追い付かず、設備の面では課題も残されていた。また、複数の小学校が連合して実施したため、指導者の連携でも問題が生じていた。大規模化したゆえに、その質的な面では多くの改善が必要な状況にあったといえる。

最後に、大正末期から昭和期における函館市の「林間学校」について、総括的な検討をおこなう。第1節で述べたように、函館市内で初めて「林間学校」を実施したのは、函館教育会であった。函館市において、夏期林間学校や五稜郭林間学校、各小学校の「林間学校」など、多数の実践が展開されるに至ったのは、この函館教育会の活動によるところが大きい。たとえば、五稜郭林間学校にしても、校長の宗像は函館教育会の評議員であった。さらに、金子も宗像も、教育会主催の水泳会の委員をしており、それぞれ主事と指導員を務めていた。また、各小学校の校長、教員の多くも教育会の会員であり、夏期林間学校とも関わりがあった<sup>40</sup>。

その他、夏期林間学校には、各小学校の学校医が輪番で協力していた点も、その特徴であった。そして、これら学校医が、それぞれの小学校における「林間学校」の実施を支援していた。たとえば、同時期に単独で「林間学校」を開催した函館女子小学校の「林間学校」においても、夏期林間学校の校医でもある高橋米治が学校医として協力している<sup>41</sup>。このように、教育会の夏期林間学校に参加・協力した教員や医療関係者が、五稜郭林間学校や各小学校の「林間学校」の実践にあたり貢献して

いた。

つまり、函館市においては、教育会主催の「林間学校」が先駆的なモデルとしての役割を果たし、この活動に範を取って、市や各小学校が実践を企図する関係になっていた。また、函館市による「林間学校」は、多数の児童に「林間学校」へ参加する機会を付与する役割を果たしていた。そして、先駆的モデルとしての夏期林間学校と、これをより多くの児童に普及させるための五稜郭林間学校という関係性のなかで、市内における多数の人々に「林間学校」が受容され、発展したのである。大正末期から昭和初期における「林間学校」の受容と発展を実現するうえで、このような関係性が形成されていたことは、重要な条件であり、その発展の大きな推進力になるといえる。とりわけ、函館市においては、教育会や市内の学校医など、各小学校に影響力のある団体や人物が、先駆的な事業に多数関与し、経験を積んでいた点が、その発展の基盤ともなったのであった。

なお、両校では、東京市や大阪市の衛生関連企業の協力を受け、歯ブラシや強壯剤、肝油などを支給されていた<sup>42</sup>。このような事例は、東京市でも確認できたが、衛生関連の企業にとっても、「林間学校」は自社の製品を売り込む場として機能していたと考えられる。大正期から昭和初期の地方都市における「林間学校」の受容と発展において、これら企業の支援や影響があったことにも留意すべきといえる。

今後の課題としては、1934年以降の函館市における「林間学校」の目的や活動内容を明らかにするとともに、他の地域との共通性や相違点を明確にする必要がある。また、発展的な課題として、大正末期から昭和初期の他府県における受容と発展の過程、活動の目的、内容との比較をおこない、この時期に展開された「林間学校」の実態を総合的に明らかにしたい。

## 【注】

- 1 大正期の「林間学校」は実施形態により多様な名称が付された。これらは「常設型」「宿泊型」「通学型」の3種に分類されている。常設型は、高原や海浜に実際に学校を建設したものであり「養護学校」に近い。宿泊型は、夏期休暇等に実施される宿泊学習であり、現在の林間学校に近い。通学型は、近辺の河川や草原において簡易的に実施されたものである。以下、本論文では、これらの総称として「林間学校」と表記する。
- 2 「虚弱児童」が急増した背景には、「虚弱性」の判定基準の変更があった。この点は、拙稿（「大正期における「虚弱児童」の教育問題化と「野外教育」」『論叢：玉川大学教育学部紀要』2011年、47-64頁。）を参照。
- 3 拙稿（「大正期の地方都市における林間学校受容に関する一考察」『論叢：玉川大学教育学部紀要』2010年、91-110頁）を参照。
- 4 文部大臣官房学校衛生課『夏期に於ける体育的施設の状況調査』、1926年、8頁。
- 5 山田誠「初期の夏期林間学校の性格について」『神戸外大論叢』第27巻4号、1976年、105-124頁。
- 6 渡辺貴裕「〈林間学校〉の誕生」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第51号、2005年、343-356頁。
- 7 桐山直人『茅ヶ崎の小さな学校』草土文化、1992年。
- 8 このような研究には、加藤理の一連の研究があるのみである。「大正時代・昭和初期の林間学校・臨海学校」『論叢児童文化』41巻、2010年、10-19頁。「伊勢堂山林間学校の開校」『論叢児童文化』42巻、2011年、8-16頁。「伊勢堂山林間学校と児童文化活動」『論叢児童文化』43巻、2011年、9-16頁。
- 9 神山茂『函館教育史』函館文化会、1971年、375頁。
- 10 大正期には「虚弱児」選定のための共通基準が定められておらず、各実施主体が独自に基準を設定していた。

このため、一口に「虚弱児」といっても、身体の状態は様々であり、選定方法や基準を検討しなければ「虚弱児」がどのような子どもを指すか明確にならない。

- 11 たとえば、夏期林間学校の第1回の報告書の1頁から引用した場合、名称を「夏」と略記し（夏，1，1）と文末に表記する。また、函館市主催の五稜郭林間学校の名称は「五」と略記する。なお、注記の最後に報告書の一覧を示す。
- 12 北海道は1899年から北海道区政下にあった。このため、函館も1922年に市政が施行されるまで区であった。本論文では区政下の時代は函館区と表記する。
- 13 詳細は注2の拙稿を参照。
- 14 函館市役所『函館市勢要覧』1926年，1頁。
- 15 函館市『函館市史』都市・住文化編，1995年，89-90頁。
- 16 注3の拙稿を参照。以下、大阪府や香川県との比較は拙稿をもとに述べる。
- 17 函館教育会『函館教育会沿革史』1943年，1頁。
- 18 同上，95-96頁。
- 19 神山，前掲書，375頁。
- 20 佐藤精『斉藤興一郎伝』第一印刷所，1957年，389頁。なお、本論文では、函館大火前の1933年までの実践を対象とする。
- 21 斉藤は、1873年に新潟県で生まれた。後に函館で医師をしていた叔父の田澤謙の書生となり、独学で医師免許状を取得した。叔父の死去後に開業医となり、函館区の公医、道庁の臨時海港検疫委員、函館区伝染病予防委員などを務めた。その後、1906年から1912年まで7年間ドイツに留学し、細菌学や衛生学の研究をおこなった。特に、ヴェルツブルク大学で衛生学助手を務めた際には、結核に関する研究をおこない、ドイツの結核予防策や治療法についての調査も実施している。帰国後も結核予防の必要性を提唱し、1920年には函館区に結核療養所の創設を提言し、その開設に大きな役割を果たした。同年、周囲の推薦により函館教育会の会長となり、1938年から1942年までは函館市長も務めている（佐藤『前掲書』）。
- 22 斉藤興一郎「林間学校と小学野球」『教育新潮』6巻12号，教育新潮社，1955年，扉。
- 23 なお、この記述からは、斉藤が「林間学校」という名称を初めて使ったように理解できるが、1921年の時点では多数の実践で「林間学校」という名称が使用されていた。たとえば、文部省による「林間学校」の調査報告には、「調布多摩川夏期林間学校」「瀧ノ川夏期林間学校」（以上、東京府）「下鴨林間学校」（京都府）「夏季林間学校」（兵庫県）「高松林間学校」（香川県）などの名称が挙げられている（文部大臣官房学校衛生課『大正七、八、九、三箇年間に於ける全国夏季体育的施設』1921年，1-2頁）。
- 24 「林間学校奨励補助ニ関スル件」『議員回付建議書類原義（四）』（国立公文書館：本館-2A-029-00・請願00046100）。
- 25 渡辺千代吉「本校の試みた早起体操会の実際」『帝国教育』10月号，1924年，46頁。
- 26 金子は後に函館市内新川小学校の校長などを務め、1942年に教職を退くまで、林間学校の主任として中心的役割を果たした（函館教育会『前掲書』，108頁）。
- 27 文部省が定めた「発育概評決定標準」（身長，体重，身長によって体重を割った商，の三項目について，男女各年齢の「標準値」を定めたもの）を基準として，児童の発育状況を甲乙丙の三段階で表したもの。
- 28 この点については拙稿（「大正末期東京市における「身体虚弱児童」の実状とその教育に関する一考察」『地方教育史研究』第29号，65-87頁）を参照。
- 29 斉藤，前掲書。
- 30 当時は，受験競争が過熱し，過度な勉強が健康を崩す原因として批判されていた。
- 31 ただし，参加人数が増えると，学習などにおいては男女別年齢別の学級編成とした記述が確認できる（函館教育会『第九回夏期林間学校之概況』1929，5頁）。
- 32 詳細は拙稿（「大正末期の東京市における林間学校—「御殿場夏期林間学校」と「佛蘭西寄贈病院」—」『早稲田教育評論』第22巻，2008年，23-42頁）を参照。

- 33 「五稜郭林間学校」という名称が報告書に記載されるようになるのは、1932年以降のことであるが、本論文では便宜上この名称を使用する。なお、1926年の函館毎日新聞には、「五稜郭林間学校」の名称が使用されている（「老松の樹蔭に夢圓らかな子供の国市設五稜郭林間学校」『函館毎日新聞』1926年8月9日朝刊、1面）
- 34 「林間学校 水泳会 一日から一斉に」『函館新聞』1926年8月1日朝刊、2面。
- 35 「けふ一斉開校式」『函館日日新聞』1926年8月1日夕刊、1面。「林間学校」『函館新聞』1926年8月2日夕刊、3面。「海に山に大自然を歓喜する児童の群れ」『函館毎日新聞』1926年8月16日朝刊、1面。
- 36 函館市函館女子尋常高等小学校『第二回夏季林間学校概況』1926年。
- 37 函館市『第十七回函館市統計要覽大正十四年』1927年、139頁。
- 38 宮入鹿之助『宮入衛生問答』南山堂書店、1922年、12-13頁。
- 39 第1回の数値のみ、『函館毎日新聞』の記事（「前掲」1926年8月9日朝刊）を参照した。その他の数値は、各回の報告書を参考にしている。
- 40 たとえば、1925年から「林間学校」を実施した函館女子小学校の校長羽田多吉も函館教育会会員であった。
- 41 函館市函館女子尋常高等小学校、前掲書、3頁。
- 42 第10回の夏期林間学校の報告書には、協力者に東京市の小林富次郎（株式会社小林商店（現ライオン株式会社）の社長）、中山太陽堂、大阪市の伊藤千太郎（伊藤千太郎商会（現ワカサ株式会社）の社長）、森下博（森下博薬房（現森下仁丹）の社長）の名前が見られる（函館教育会『第十回夏期林間学校之概略』1930、16頁）。また五稜郭林間学校でも、東京藤澤友吉商店から強壯剤の提供を受けるなどしている（函館市『第八回函館市主催五稜郭林間学校概況』1933年、7頁）。

### 【使用報告書一覧】

- 函館教育会『第一回夏期林間学校実施状況成績』1921年。  
函館教育会『第二回夏期林間学校実施状況成績』1922年。  
函館教育会『第三回夏期林間学校実施状況成績』1923年。  
函館教育会『第四回夏期林間学校報告書』1924年。  
函館教育会『第五回夏期林間学校之実際』1925年。  
函館教育会『第六回夏期林間学校之実際』1926年。  
函館教育会『第七回夏期林間学校之実際』1927年。  
函館教育会『第八回夏期林間学校之概況』1928年。  
函館教育会『第九回夏期林間学校之概況』1929年。  
函館教育会『第十回夏期林間学校之概況』1930年。  
函館教育会『第十一回夏期林間学校之概況』1931年。  
函館教育会『第十二回夏期林間学校之概況』1932年。  
函館教育会『第十三回夏期林間学校之概況』1933年。  
函館市役所『函館市主催林間学校概要（於五稜郭）』1927年。  
函館市役所『第三回函館市主催林間学校実施報告』1928年。  
函館市役所『第四回函館市主催林間学校実施報告』1929年。  
函館市役所『第五回函館市主催林間学校実施報告』1930年。  
函館市役所『第六回函館市主催林間学校実施報告』1931年。  
函館市役所『第七回函館市主催五稜郭林間学校概況』1932年。  
函館市役所『第八回函館市主催五稜郭林間学校概況』1933年。

### 【謝辞】

本研究はJSPS 科研費（25750275）の助成を受けたものである。